

二〇一九年度 入学試験問題

経済学部A方式II日程・社会学部A方式II日程・スポーツ健康学部A方式

二限国語 (60分)

〈注意事項〉

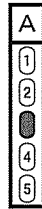
- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

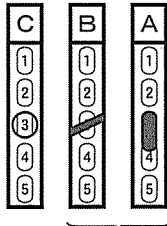
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

アメリカの著名なジャーナリストであるウォルター・リップマンは、第一次大戦直後『世論』という書物を著わした。今日でもマス・コミュニケーション研究の、古典として知られるこの書物は、次のようなエピソードで始まっている。大洋のなかに一つの島があつて第一次大戦の直前、少数のイギリス人、フランス人それにドイツ人が住んでいた。この島では六十日に一度、イギリスの郵便船が通つて来ることによつて、わずかに外界との接触が保たれていた。一九一四年九月この島に住む人々の主たる関心は、新聞にケイサイ^(あ)されていたある殺人事件の公判の結果であつた。まことに平和な生活であつたと言う他はない。しかし予定の船はなかなかやつて来なかつた。そして郵便船がようやくこの島に到着したとき、この島に住む人々は互いに敵国人になつたことを知つてギョウテン^(い)した。海底電線の通じていなかつたこの島では、第一次大戦が始まつたことを誰も知らなかつたのである。

リップマンはこのエピソードを手掛りとして「われわれの頭のなかにある映像」と「現実」との間には常にズレが存在している、という事実を述べている。この島の住民の例でいえば彼らの頭のなかにあつた映像は、戦争のない平和な世界であつた。だからこそ彼らの最大の関心事は、殺人事件の公判の結果だつたのである。しかしながら現実の世界においては、既に第一次大戦が開始されていた。そしてイギリス人とフランス人は、ドイツの敵国人になつていたのである。このようにわれわれの頭のなかの映像と、現実とのギャップを語るリップマンは、われわれの生活は次のような三角関係によつて、成り立っているといふ。つまり「われわれの頭のなかにある映像」、「その映像に向つて働きかけるわれわれの行為」、それに「現実の世界」、この三つの要素の三角関係によつて成り立っているといふ。

私はこのリップマンの「三角関係」の話を知ると、カリフォルニア大学の社会学教授であつたハーバート・ブルーマーのことを思い出す。ブルーマー教授に私が教室で初めて会つたのは一九六五年の冬、私がスタンフォード大学で修士号を得て、カリフォルニア大学の社会学部の、博士コースに入学した時だつた。あれはスタンフォードのセミナーのように、夜の七時半から

始まる社会学理論の講義であった。ブルーマー教授は、シカゴ大学時代アメリカン・フットボールの著名な選手であった。一九六五年当時教授は、既に定年直前の六十四歳であつたけれども、オウネン^(ウ)の名残を留めて、赤ら顔のガツシリした巨漢であつた。このブルーマー教授は、リップマンと同様の認識論を教室で展開していたものである。たとえばステイル製のいすを軽々と片手で持ち上げて、学生達の前に置く。そしてそのいすにわざとつまずいて見せて、人間が意識しない限りいかなる外界の現実も、彼にとっては存在しないと主張する。人間は自己の意識に上つた限りの現実に対して行為する。もしその人間の意識が、現実の世界とズレているならば、人間は外界からの報復を受けたとき初めて、自己の意識の誤つた部分を訂正することができる。もしこの報復がトラックと衝突するというような、重大な事件であつたならば、彼は自己の意識を修正する機会を、永遠に失うかもしれない。これがブルーマー教授の主張であつた。

研究を組織するには、まず特定の現象を選び出し、その現象を引き起こす原因を求めて因果関係を設定しなければならない。しかしもちろん、すべての研究がこのような因果関係に基く仮説を立てるだけで終るのであつたなら、それは経験科学^(ウ)とは言えないであろう。仮説を立てた研究者は、次にその仮説を経験的事実に合わせて、テストしなければならない。検証と呼ばれるこの過程はいわば「われわれの頭のなかにある像」を、「現実の世界」と照らし合わせて、その間に相違がないか否かを調べる過程に似ている。

しかしながら、ここでわれわれは頭のなかの像と現実との差だけでなく、抽象と経験的事実のことを考えに入れなければならない。確かに科学における検証とは、リップマンの言う「われわれの頭のなかの像」と、「現実の世界」とをつき合わせて、より正確な像をわれわれの頭のなかに描く過程に似ている。しかし科学における「頭のなかの映像」とは、現実の世界と比較して、より抽象的な、より一般的な、より適用範囲の広い、従つて問題解決により役立つ映像なのである。ここで私たちは仮説の問題から一步進んで、概念と理論のことを、考えなければならぬ。

正直にいつて私はどうも「概念^(ウ)」という訳語が好きになれない。漢字の選択が誤つていないのではない。ともかく「概念」という言葉は、難解な感じを読者に与える。これに比較すれば概念の原語に当る英語のコンセプトの方がずっと簡単だし、音

の響きもよい。およそ科学や哲学の訳語というものは、明治以降に作られたものである。そのためわれわれの日常の言葉から浮き上って、話をことさら難しくする傾向がある。しかしここで「概念」という訳語を、他の言葉と入れ代えてみても、新たな用語の混乱を招くだけであろう。そこでここでは、いくつかのやや硬い訳語を使って話を進めなければならぬ。

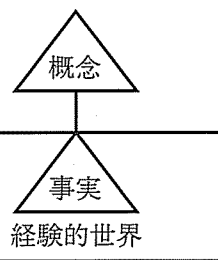
さて問題はわれわれの頭のなかにある概念のことであった。概念などという話が難しくなる。しかし概念とはもともと人間の経験が凝縮したものであろう。われわれは誰でも幼児のときからの経験を蓄積して、その結果、経験のエッセンスを頭のなかに収めている。赤いリンゴしか食べたことのない幼児は、黄色いリンゴを見て最初はナシかと疑う。しかし黄色いリンゴがあることを知れば、赤いリンゴも黄色いリンゴも同時に包括する、より一般的なリンゴという概念ができ上るであろう。最近アメリカから来た友人夫婦を家に招いたとき、われわれは日本流の丸い「二十世紀」を食後に出した。ところが彼らは、こういう球形のナシもあるものと驚いた。実はこちら側も、アメリカ人が球形のナシを知らなかったという事実に接して、驚いたのである。彼らは細長い西洋ナシしか食べたことがなかったのである。私たちの家で「二十世紀」を食べた彼らは、ナシについてより一般的な「概念」を獲得したことであろう。

「A」これに似た例は私の家族も経験している。一九七三年に私たち一家四人はアメリカから日本に帰ってきた。その時、長女は小学校の二年生であった。当然のことながらアメリカで生まれアメリカで育った彼女にとって、日本の風物は一つ一つ変わったものであったらしい。私たちが日本に帰ってきたときは、九月の初めで外では油ゼミが鳴いていた。サン・フランシスコの近郊には夏でもゼミがいない。油ゼミのあの大きな鳴き声は、彼女にとってよほどイヨウ(ま)だったらしい。日本語をまだ話すことのできなかった彼女は「あのうるさい音は何なの」と英語で私に聞いた。「うるさい音」という英語を使ったのを、今でも覚えている。まさか一種の昆虫が、あのような「騒音」を発するとは考えてもいなかったのだろう。そこでたまたまあった昆虫図鑑を見せて、「ゼミ」という昆虫が、日本には存在することを教えた。するとなんと彼女は「ハエみたいな虫なのね」と言うではないか。確かによく見るとその図鑑はゼミの形は示していても大きさを示していなかった。そして上から見たゼミの平面図は確かにハエにそっくりなのである。彼女は生れ故郷のアメリカの家で見た、なじみの深い「ハエ」の概念を使って、「ゼミ」と

いう全く新しい経験的事実を、理解しようとしたのである。

カリフォルニアで育った私の長女は日本に帰ってきた時、「セミ」を「ハエ」に似た昆虫だと思った。これは人間の認識の過程をよく示した例である。人間が「頭のなかにある映像」を手掛りに「現実の世界」を理解する過程は、概念を手掛りに経験的世界

を理解しようとする、人間の認識の過程と同じである。われわれが普通「事実」と呼ぶものは、



実は「概念」によって経験的世界から切り取られた、現実の一部に他ならない。図はその関係を示している。私はここで人間の概念とは関係なしに、厳然たる経験的世界が存在することを否定しようとしているのではない。しかし無限の広がり複雑さを持つ経験的世界を、われわれの一人一人が全て、同じように認識することは不可能なことである。われわれの認識は完全な鏡のように、現実的世界を写し出しているのではない。われわれが現実に行っている認識は、われわれの持つ概念に導かれて、絶えず変化する経験的世界の一部を、辛うじてつかまえる

という仕事なのである。その意味で「**B**」ということができるのである。人間の認識の過程は、まことに主体的かつ積極的な過程であるという他はない。

1 **1** 社会学者のタルコット・パーソンズはこのような働きをする「概念」をサーチライトにたとえている。 **2** 暗黒のなかでわ

れわれはサーチライトの光によって、初めて事物を見ることができ。これと同じように「概念」というサーチライトによって照らされた事物を、われわれは「事実」として認識する。しかし現実にはまだサーチライトによって照らされていない、経験的世界の暗黒の部分が広がっている。この無限の暗黒はまだ「事実」として認識されていない、いわば残りの部分である。その意味でこの暗黒の部分は「残余カテゴリー」と呼ばれる。 **3** しかしながら単なるサーチライトと、その光によって照らし出さ

れた事物と異なって、「概念」と「経験的世界」との間には「**お**」フダンの相互作用が存在している。「概念」は人間自身の思考によって修正される。 **4** それだけでなく概念は経験的世界の、人間への働きかけによっても修正される。それは通路に置いてあつ

たイスにぶつかることによって、われわれの「頭のなかの映像」が修正されると、同じことである。

5

つまり概念が修正されるということはサーチライトの光が増えたり、角度が変わるといふことに他ならない。すなわちサーチライトの光が変わることによって、今まで見えなかつた暗闇が照らし出され、新しい「事実」が認識されるのである。

6

そして読者が既に気づいておられるように、この概念の修正、さらには新しい概念の創出こそ、人間の知的創造にとって、きわめて重要な働きなのである。

(高根正昭「創造の方法学」より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 傍線部①「われわれの頭のなかの映像と、現実とのギャップ」の例として本文中に示されている内容として、最も適切な

ものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 島の住民の最大の関心事はある殺人事件の公判の結果だったが、島の外ではその公判は注目されていなかった。
- 2 島に住む人々は郵便船の早い来航を希望していたが、現実には郵便船はなかなかやってこなかった。
- 3 島の住民は世界が平和だと思っていたので、殺人事件の公判の結果が最大の関心事だった。
- 4 島の住民は互いに仲良く共存すべきと考えていたが、戦争が始まり国籍の異なる住民は敵対することになった。
- 5 島に住む人々は世界が平和だと思っていたが、実際には第一次大戦が起こっていた。

問二 傍線部②「それは経験科学とは言えない」とあるが、それはなぜか。筆者の考えとして最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 経験科学は、特定の現象を選び、その現象を引き起こす原因を因果関係の図式で分かりやすく表現すべきものだから。
2 経験科学は、「頭のなかの映像」の中でも抽象的で、一般的な、適用範囲の広い、問題解決に役立つ映像でなければならぬから。

3 経験科学は、特定の現象とその原因について、因果関係に基づく仮説を立て、その仮説を検証する一連の過程から成るものだから。

4 経験科学は、特定の現象を選び出すだけでなく、それに関わる経験的な事実を丹念に集める過程を必ず含むものだから。

5 経験科学は、「現実の世界」を人々がどのようにとらえているかを、人々の「頭のなかの映像」を調べることで明らかにしようとするものだから。

問三 傍線部③「概念」という訳語が好きになれない」とあるが、それはなぜか。筆者の考えとして最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 「概念」という言葉が、科学における「頭のなかの映像」を示す言葉としてふさわしくないため。

2 「概念」という言葉が、読者が日ごろ使っている言葉とかけ離れていて、難しい印象を与えるため。

3 「概念」という言葉が、原語に当る英語のコンセプトに比べて難しく発音しづらいため。

4 「概念」という訳語が、原語に当る英語のコンセプトの意味を正しく表現していないため。

5 「概念」という訳語に用いられている漢字が、読者に難しく書きづらい印象を与えるため。

問四 段落「A」において、筆者は自分の家族の経験を紹介しているが、この経験はなぜこの部分に挿入されているのか。その説明として最も適切なものを、次の1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 映像が新しい経験的事実を理解するうえで役立つことを示すために、娘に昆虫図鑑の写真を見せることによって「セミ」という昆虫がいることを教えた例を挙げている。

2 人間の経験が凝縮したものが概念であることを示すために、ハエしかみたことがなかった娘が、セミを知ることによってより一般的な「ハエ」という概念を獲得した例を挙げている。

3 「現実の世界」が「概念」の理解を導く過程を示すために、娘が「ハエ」に関する自身の経験を手掛りに「セミ」を認識した例を挙げている。

4 概念を手掛りに経験的世界を理解しようとする、人間の認識の過程を示すために、娘が「ハエ」の概念を手掛りに「セミ」を理解しようとした例を挙げている。

5 人間が幼児期からの経験を蓄積して概念を獲得することを示すために、「セミ」がいないサン・フランシスコで生まれ育った娘が、日本で油ゼミの大きな鳴き声に驚いた例を挙げている。

問五 本文中の空欄 B に入る言葉として最も適切なものを、次の1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 事実^レは概念^レの一部である。

2 事実^レは概念^レと無関係に存在する。

3 概念^レは事実^レによって切り取られる。

4 概念^レがなければ事実^レもない。

5 概念^レは事実^レに導かれる。

問六 本文からは、つぎの一文が抜けている。それは本文中の [1] [6] のいずれに入れるべきか。最も適切な個所を [1] [6] の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

言いかえれば「残余カテゴリー」という暗闇が、新しい「概念」によって照らされて「事実」に変化するのである。

問七 本文の内容に合致するものを次の1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 人間の頭のなかの映像は、現実の世界をありのままにうつす性質をもっているが、現実世界における経験の相違が、世界認識の相違を生じている場合がある。
- 2 人間が経験的世界を理解しようとする際に用いる概念は、経験的世界が人間に働きかけることによってごく稀に修正される。
- 3 人間は幼児の頃に様々な経験を通じて現実世界の事物の概念を獲得するものであり、成人後に概念を獲得することはあまりない。
- 4 人間が概念を手掛りに見ている世界は現実世界のごく一部であり、現実世界の多くの部分は「事実」と認識されなまま存在している。
- 5 人間の知的創造にとって重要なのは、既存の概念にとらわれず、絶えず変化する複雑な経験的世界を正しく理解しようとすることである。

問八 カタカナで書かれた熟語(あ)～(お)の傍線部にあてはまる漢字はどれか、1～7の中から、それぞれ一つずつ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(あ)	ケイ サイ	1	採
(い)	ギョ ウテン	1	迎
(う)	オウ ネン	1	翁
(え)	イヨ ウ	1	容
(お)	フ ダン	1	不
		2	普
		3	付
		4	歩
		5	布
		6	扶
		7	負
		2	驚
		3	業
		4	凝
		5	曉
		6	興
		7	仰
		2	催
		3	裁
		4	歳
		5	載
		6	細
		7	再
		2	住
		3	往
		4	応
		5	王
		6	央
		7	横
		2	妖
		3	様
		4	用
		5	揺
		6	要
		7	庸

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である——これは、政治学者のベネディクト・アンダーソンがナシヨナリズム論の古典となった『想像の共同体』の中で国民を規定した、あまりにも有名な一節である。知ることも会うこともない人々を同じ「国民」として想像することができたとき、初めて「国民国家」が成立する。このようなアンダーソンの国民国家論は、あたかも世界史の A であるかのように、どの国や地域にあっても当てはまるとされてきた。

ア、日本もまた例外ではない。一般に日本で国民国家形成の「一つの段階が完了」するのは、明治後期のこととされる。アンダーソンの影響を受けた歴史学者、タカシ・フジタニの『天皇のページェント』は、明治初期には天皇がしばしば全国を回っていたのに、明治二十年代になるとそれが行われなくなるという前提のもとに、こう述べている。

天皇が各地を巡幸していた時期、全国の人々が一巡幸のある瞬間に同時に参加していると感じていたとは考えにくい。日本全国を領土として掌握する儀礼としての巡幸はむしろ、主に空間的統合の論理によって作用していたといえる。天皇の身体が動くことによって、天皇の巡幸する沿道の様々な場所が——同じ空間内ではなく——時間を通して、ひとつの空間的連続体へと形づくられていったのである。つまり、天皇は違った時間に各村々を訪れ、別の町や村に住む人々は、天皇の巡幸を同時に共有していたわけではない、ということである。したがって、遠く離れた地域共同体の人々が、巡幸の通過するさい、同じように新しい国家の象徴や慣行を数多く目にすることはできても、一国内の人間が同じ時間を生きているという時間的同一性という点からは、この様式の国家儀礼はふさわしくなかったといえる。この意味では、天皇の巡幸はやはり国民的結合の焦点とはなりにくかった。近代国民国家にとっては、^①時代遅れの儀礼様式だったのである。

ここでいう「巡幸」とは、天皇が二カ所以上を回ることである。ついでにいえば、「行幸」は天皇が一カ所を訪問することで、

天皇の「巡幸」「行幸」に対応する用語が、皇太子(皇后、皇太后)の「巡啓」「行啓」である。両者を合わせて、「行幸啓」と呼ぶこともある。「奉送迎」や「奉迎」「奉告」といった「奉」のつく語、「御召列車」や「御用邸」「御所」といった「御」のつく語、あるいは皇室から物を与える「下賜」を含め、本書では便宜上、これらの皇室用語をそのまま用いることにする。

フジタニによれば、天皇の巡幸は国民国家の成立を妨げる「時代遅れの儀礼様式」なのであり、明治後期になって行われなくなるのは必然の成り行きであった。そのころには巡幸に代わって「御真影」^{注1}が全国の学校に行き渡るとともに、東京が国家的象徴・儀礼的中心となる。「明治憲法発布式以降」には、戦勝記念式や皇室の葬儀、結婚式、結婚記念式など、まったく新しいページメントが国家儀礼の新しい体系の中核を形づくることになった。東京を中心に行われたこれらの「新しいページメント」は、天皇の身体がさらされていた巡幸とは異なり、直接は見えない「国家的シンボルを同時的に認識するという集団行為によって、個人個人が空間を超え、時間を通じ、かつ同時に、相互につながりあっていることを体験できた」とされる。

歴史学者の牧原憲夫は、『客分と国民のあいだ』の中で、フジタニの説明を補足するかのようにな、こう述べている。

〔一八八九年の〕憲法祝賀行事は東京や大都市だけでおこなわれたのではない。新聞には各地のとりくみが競争をあおるかのよう列挙されており、実際どここの町村でもなんらかの記念式典が催されたはずだ。そこにはやはり「御真影」が登場し、万歳は唱えないまでも東京の方角に「拝礼」をしたところも少なくなかった。〔中略〕しかもここでは、新皇居での憲法授与とその時間が念頭におかれており、自分たちの儀礼が全国的におこなわれている行事の一環であることも充分に意識されていた。〔中略〕これ以降、^{注2}紀元節・^{注3}天長節のたびに小学校に住民が参列させられるが、それはまさしく「全国一斉」であることに意味があり、「君が代」をうたい「万歳」をとるなかで、人びとは「日本国民のひとり」であることを実感させられることになる。

牧原もまた、フジタニと同様に「巡幸の時代」から「帝都の時代」へとという大きな時代の変化が一八八九年頃を境に起こってい

たと認識しており、明治後期になると、天皇がわざわざ全国を回らなくても、「御真影」がその代わりの役割を果たすとともに、東京をはじめ全国で行われる紀元節や天長節の儀礼を通して、人々が自らを国民と認識する「想像の共同体」が確立していたと見ていることがわかる。

② 果たして、本当にそういえるのか。もしもフジタニや牧原の説のとおりだとすれば、「御真影」が行き渡り、「新しいページメント」や紀元節・天長節の儀礼が定期的に行われている限り、近代天皇制は安定し、明治天皇、大正天皇、昭和天皇という三人の天皇の違いは全く問題にならないことになる。明治後期にいったん確立された国民国家は、天皇の交代とは全く関係なしに存続することになり、天皇は身体性を失って単なる「機関」となるのである。

しかし実際には、近代天皇制というシステムは徳川体制などとは異なり、個別の支配者の身体とは無関係に安定していたわけではない。天皇の身体がときに近代天皇制を危機に陥らせ、ひいては国家に重大な影響を及ぼすことは、大正天皇の病気という問題を考えただけでも明らかだろう。

それに明治後期になると、本当に「御真影」が行き渡るのだろうか。近年の教育史の研究は、「御真影」が全国各地に浸透してゆくのは明治後期ではなく、それよりもはるかに遅かったことを明らかにしている。教育勅語の暗唱が学校現場で広く強制されるようになるのは昭和初期になってからであり、「御真影」も明治末期までに尋常小学校に下賜されたのは全国の約六割にすぎなかった。学校教育によって、近代天皇制が早くから確立されていたとは簡単にいえないのである。

フジタニのいう「新しいページメント」も、いささか過大評価の気味があり、明治後期の東京で国家儀礼がどれほど行われていたのかという疑問が残る。「戦勝記念式や皇室の葬儀、結婚式、結婚記念式」は、せいぜい数年に一度程度行われた儀礼にすぎず、定期的に行われたものではない。東京の宮城前広場（現・皇居前広場）で天皇を主体とする大規模な儀礼がしばしば行われるようになるのは、後に触れるように昭和初期になってからである。

またフジタニや牧原のいうページメントの「時間的同一性」や儀礼の「全国一斉」にしても、果たしてどれだけそういえるのか。建前としてはそうかもしれないが、本当に明治後期から、全国で同じ時間に「相互につながりあっていることを体験できた」り、

『日本国民のひとり』であることを実感させられていたのか、疑問なしとしない。私見ではこうした体験が可能となったのは、一九一五年の大正大礼（即位礼および大嘗祭）が最初であり、「国民奉祝の時間」や「全国民黙禱時間」などが設けられ、全国一斉の宮城遥拝や天皇の靖国神社参拝に合わせたの黙禱がしばしば行われる日中戦争以降になって本格化したものと考ええる。

このように、フジタニや牧原の説には、疑問点があまりに多い。それは結局、アンダーソンに影響されて明治天皇の行幸を「時代遅れの儀礼様式」にしたいあまり、

B

無理な前提に立っているからではなからうか。

I

一年ごとの行幸

件数自体は、九一年から大幅に減少しているが、それはあくまで、東京府内の政府や国家機関などへの行幸の減少によるものである。実際には明治後期になっても、地方行幸が依然として続けられている。不定期的だった東京府外への巡幸や行幸は、陸海軍連合大演習の統監と海軍観兵式の親閲を目的とする一八九〇年の行幸以降、かえって定期的に行われるようになる。

もつとも、こうした事実誤認が生まれたのは、従来の研究自体に問題があったからかもしれない。

1

1 というのも、これ

までの近代日本の行幸啓に関する研究は、圧倒的に明治初期の巡幸に偏ってきたからである。遠山茂樹、多木浩二、佐々木克吉見俊哉など、いずれもこの例に属する。そこにはやはり明治初期の巡幸を、徳川体制が崩壊してから、国民国家が誕生し、近代天皇制のイデオロギーが確立されるまでの過渡的な段階に位置づけようとする暗黙の前提があったように思われる。

2

しかし天皇の公式の巡幸や地方行幸は、明治後期から昭和初期にかけて、大正天皇が「引退」を余儀なくされた時期を除いて、一貫して続けられていた。一九〇〇年から二六年までは、それに加えて、二人の皇太子（後の大正、昭和天皇）が地方巡啓を繰り返している。大正天皇は皇太子時代に沖縄県を除く全道府県と大韓帝国を訪問しており、昭和天皇も皇太子時代にすべての道府県と植民地の台湾、樺太を訪問している。このほかに、本論では言及しないものの、大正後期からは貞明皇后が単独でしばしば東京府外への行啓を行ったり、秩父宮や高松宮が植民地を含む全国や「満州国」を訪問するようになる。明治初期よりもむしろ大規模な行幸啓が、それ以降にしばしば行われているのである。

ウ

近代日本では、時期によって後述するような段階の違いはあるにせよ、天皇や皇太子による行幸啓を全国レベルで繰り返す、支配の主体を訪問した地方の人々、狭義の政治から疎外されていた女性や外国人、学生生徒を含む人々に視覚的

に意識させることを通して、彼らを「臣民」として認識させる戦略がほぼ一貫してとられていた。3 フジタニが先に指摘した、「空間的統合の論理」としての巡幸の限界は、それが文字どおり植民地を含む全国各地にまで拡大することで、最終的に克服されるのである。

ここで重要なのは、抽象的に（想像する）のではなく、具体的に（見る）ということである。4 たとえどこに住んでいようが、フジタニのいう「国家的シンボルを同時に認識する」機会が与えられ、その生々しい体験を通して「臣民」であることを実感できたところに注目するべきである。

このような支配は、イデオロギーのような抽象的で観念的なものではない。あくまで個別の天皇や皇太子の身体を媒介とする、視覚的で具体的なものである。本書ではそれを、③〈視覚的支配〉と呼んで重視することにした。明治、大正、昭和を一貫する〈視覚的支配〉の実態を探ることなしに、近代天皇制を考察することはできないといつてよい。

エ それは、明治になって突然出てきたものではなく、後述する徳川体制という、東アジアでも特異な体制が二百年以上も続いた「遺産」を半ば継承したものであった。つまり〈視覚的支配〉とは、世界史のA に還元されない、あるいは国民国家の成立によって解消されない、近世、近代日本に通底する支配様式であったというべきであり、それが近代になつてどのように継承されながら変容していかについても、注意深く探る必要がある。

だが先に述べたように、明治初期を除いて、近代日本の行幸啓の研究は驚くほど遅れている。5 そこで本書は、従来の史料や論文以外に、新聞や「奉迎誌」、政治家の日記などを大量に用いながら、行幸啓に見られる〈視覚的支配〉の実態をなるべく具体的に検証してゆきたい。それを通して、近代日本が「想像の共同体」というよりはむしろ、「可視化された帝国」となつてゆく過程が明らかにされるはずである。

（原武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓「増補版」』より。ただし原文の一部を変更した。）

注1 御真影

各学校に貸与された天皇・皇后の肖像写真。

注2 紀元節

神武天皇が即位したとされる日に基づいて制定された祝日で、二月十一日のこと。

注3 天長節

天皇誕生日のこと。

問一 本文中の空欄

ア

エ

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ

選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-------|---|-----|---|-------|---|------|
| ア | 1 | いわゆる | 2 | 但し | 3 | つまり | 4 | なかんずく | 5 | 無論 |
| イ | 1 | さらに | 2 | したがって | 3 | 確かに | 4 | とはいえ | 5 | むしろ |
| ウ | 1 | そのうえ | 2 | だが | 3 | 例えば | 4 | とりわけ | 5 | 要するに |
| エ | 1 | はたして | 2 | あるいは | 3 | いわば | 4 | なかでも | 5 | もつとも |

問二 本文中の空欄

A

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマ

ークせよ。

- 1 最終形態
- 2 重大発見
- 3 典型事例
- 4 発想転換
- 5 発展法則

問三 傍線部①に「時代遅れの儀礼様式」とあるが、なぜフジタニによって「時代遅れ」と主張されるのか。フジタニが考える理由としてふさわしいものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 空間的な統合は、東京で行われるようになる国家儀礼を通じて達成されるから。
- 2 行幸によって、同じ時間に相互につながりあっていることを体験することができた人々は限られていたから。
- 3 行幸は明治後期にはほとんど行われなくなるから。
- 4 御真影が全国に広く行き渡るようになるから。
- 5 国家儀礼を行うことは前近代的であるから。

問四 傍線部②に「果たして、本当にそういえるのか」とあるが、筆者がフジタニや牧原の説には疑問点が多いと考える根拠としてふさわしくないものをつぎの1〜6の中から二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 実際には、御真影が全国に浸透するのは明治後期よりも遅い時期だったから。
- 2 実際には、近代天皇制は支配者個人の身体に依存していたから。
- 3 実際には、明治後期の東京では国家儀礼はそれほど頻繁に行われていたわけではなかったから。
- 4 実際には、明治後期以降も行幸は続けられており、東京以外の行幸はむしろ増えてきているから。
- 5 実際には、行幸という体験によっては、「臣民」であることを実感できなかったから。
- 6 実際には、これまで行幸に関する研究は極めて少なかったから。

問五 本文中の空欄 **B** に入る文として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 一部の地域への巡幸や行幸が見られなくなることで、全国レベルの行幸そのものが全く行われなくなるという
- 2 近代天皇制は過渡的な段階の制度に過ぎないという
- 3 行幸によって「国民のひとり」であることを実感できるという
- 4 「新しいページェント」は必ずしも効果的ではなかったという
- 5 知ることも会うこともない人々を同じ「国民」として想像することで「国民国家」が成立するという

問六 本文からは、つぎの一文が抜けている。それは本文中の **1** ～ **5** のいずれに入れるべきか。最も適切な個所を **1** ～ **5** の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

人々は、牧原がいうごとく、ただ一緒に万歳を叫び、君が代を斉唱するだけで「日本国民のひとり」となったのではなかった。

問七 傍線部③に「視覚的支配」とあるが、筆者が言うところの「視覚的支配」に関する記述としてふさわしいものを、つぎの1～6の中から二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 支配者の生身の身体を見せることである。
- 2 天皇の肖像写真によつて支配者を意識させることである。
- 3 国家儀礼を執り行いうる支配者の能力を見せることである。
- 4 政治から疎外されていた人々をイデオロギーによつて包摂することである。
- 5 徳川体制から継続していた支配様式である。
- 6 あたかも支配者を視たかのように思わせるイメージ戦略のことである。

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

宇宙論から撤退して科学・技術・社会論に軸足を移した私だが、三〇年以上も宇宙論研究に没頭してきただけに、やはり何がしかのことは書き残しておきたい気になって、『観測的宇宙論への誘い』と題する本を執筆することにした。研究の楽しみとともに、論争となっている諸課題について私なりの感想を記して後世の判断に委ねようとの思いからであった(それほど大げさなものではないけれど)。原稿を書き上げて編集者に渡した直後に、「これを紙の本と同時に電子出版にしてはどうでしょうか」と持ちかけられた。考えてもいかなかった思いがけない申し出なので躊躇していたら、追いかけて「宇宙に関する本には沢山のきれいな天体写真を使うことになるので、電子版の方が素晴らしい画像が使えて迫力がますます」と言われる。私は「本のテイサイが決まってから判断しましょう」と言ってお茶を濁さざるを得なかった。

ア 人間は有機物でできている。有機物とはカーボン(炭素)を主体とした化合物だから、人間は a と相性がよい。紙も b であり、本は紙に限るのである。その上、人間はアナログで物事を認識している。ある重要な事柄がページの何行目に書いてあったと覚えているのではなく、本の三分の二辺りのページの上から三分の一くらいのところにあったと記憶してページを繰り直すのが常であり、それを探し当てるのが楽しみなのである。ときには、線を引いたり片隅を折畳んだりして目印にし、その部分だけを繰っては何度も読み返したりもする。そうすると妙に愛着が生まれて言葉が頭に染みこむというものである。

イ 私は、 c 製の電子画面とは性が合わない。辞書とか百科事典のような、その場限りの知識を得るには電子書籍は便利だが、考えたり想像したりしながらページを繰り、後戻りしたり飛ばし読みしたりしてから元に戻ってくる、というような読み方には電子本は不都合の上ないからだ。何しろ d は石頭だから融通が利かないこと夥しく、インターネットをしても痼癩を起こして放り出す始末である。だから、 e 人間は f とは折り合えない、電子出版なんて文化を貶めるもの、と考えてきたのだ。

ウ、実際に電子出版を勧められると、少々動揺した。私の本はそう売れるわけでもないし、ましてや宇宙論の硬い本だから売れ行きが悪いのは目に見えている。この出版不況の時代に出版社は慈善事業をしているようなものである。手軽に電子出版ができるなら、出版社の顔を少しは立てられるかもしれない（私は出版社に対しては優しい人間なのである）。きれいな写真売り物にした本ではなく、書いている中身で勝負のつもりなのだが、写真が人目を惹いて電子本を手取る人がいればファンが少しは増えるかもしれない（本が売れて欲しいという色気もあるのだ）。というわけで、今どうしようかと悩んでいる最中である。

子どもの理科離れが話題になっているが、その根源には実は大人の理科離れがある。科学は難しく取っつきにくいのがその理由だが、それだけではない。科学は専門家にお任せして、その成果を利用するだけで満足している大人ばかりになったためだ。科学に無関心の大人であっても、ちょっと振り向いてもらいたい、そんな思いで本を書こうという気になる。ならば、電子書籍という形ではあっても、科学に近づく人間が増えればいいことではないか。また科学の本には一般の文芸作品や論説本とは違った側面があるのではないかとつらつら考えてみた。

文学の作品はこれ一つしかないという意味で永遠だが、科学の本はそのチケン(い)が次々と書き換えられていく運命にある。科学は積み上げて成り立っており、先人の仕事を乗り越えつつ、時代に制約された実験技術の下でとりあえずの結論を提示するしかないからだ。その意味で本の寿命は短く、たった数年前の出版なのに入手できなくなってしまう。ましてや、私の本などは一年も経たないうちに店頭から姿を消すのが普通で、空しく裁断されて煙となっているのだろう。そう思えば紙の本であることに、少なからざる罪の意識が生じる。単なる資源の浪費ではないか、と。電子書籍であれば、ほんの少しのシリコンを占領するだけで済むばかりでなく、時間を超えて保存してくれるから空しさも帳消しになるかもしれない。記録媒体としての電子書籍は評価すべきなのだろう。

たまに古典と言われる科学の本も存在する。例えば、アインシュタインとインフェルトが書いた『物理学はいかに創られたか』は七〇年を経てもなお読み継がれている。簡明にして真髓をつき、図版は少しだけだが、ガンチク(う)に富む。ページを何度

も行き来するうちに理解が深まり、いつ手にとつても新しい発見がある。もはや黄ばんでしまった紙がいつそう私を招いているように思える。あるいは、学生時代に読んだ教科書は、そこに残された書き込みもあつて苦闘した歴史が懐かしく思い出され、新鮮な気持ちを蘇らせてくれる効用がある。歴史を経た紙の本であればこそ、科学の古典として自分と重ね合わせる事ができるのだ。それは科学者の誰もが体験することであり、鮮烈な印象となつて心に刻み込まれ、アナログ的に内容が頭の書庫に並べられることになる。学問の継承にはこのような体験が不可欠である。これらが電子書籍となれば、^③果たして学問が血肉化するのかどうか疑問を持つてしまふ。

エ、記録媒体としての電子書籍、自分の頭を鍛えるための紙の本という棲み分けができそうである。というより、それが必然の道のように思える。豆粒一つに百科事典全体が収まるような技術を利用しない手はないし、それこそが省資源となり文化の継承を確実なものとするからだ。辞書、辞典、読み捨て本、ノウハウ本などは電子書籍で十分その役を果たすだろう。それに対し、絵本、教科書、古典、哲学書などは紙の本であり続けるに違いない。むしろ始めは両方で出版し、生き残つたものだけが紙の本として継続されることになると考えられる。過渡期に本の選別が進むのである。そして二〇年先となれば、本の出版は様変わりしていることだろう。電子出版が当たり前となるのに対し(それは大事な本ではないことを意味する)、紙の本として出版できることが勲章となることだ。「せっかく価値ある本なのだから、是非とも紙の本として出版したい」と出版社が言ってくれるのを心待ちにする、なんてことを想像している。

少々皮肉っぽくなったが、新書戦争とやらで、どんな本が出ているのかさえわからなくなったご時世となつて、本の選別が不可能になりつつあるのは事実である。「悪貨は良貨を駆逐する」のと同じ現象が生じ、むしろ出版界が自分の足を引っ張り合つて共倒れの運命を歩んでいる気がする。それを是正する^(え)ケイキとして電子出版が利用できれば、と思うのだ。思い切つて電子書籍を専門とし、評判となつたものを紙の本とするというふうに逆転させれば、本のも概念も変わるのではないだろうか。

オ、記録媒体としての電子出版について心配することがある。かつて大きな録音デッキで磁気テープのルールを使つていたのがカセットテープになりCDとなつたように、あるいはビデオテープがDVDになりブルーレイになつていくよう

に、技術の進展はめざましいものがある。その結果、今時の装置は二〇年もすると使えなくなり、せっかくの記録媒体も無用の長物となりかねない。ITが栄えて、情報の記録が欠落していくのだ。その点、紙に書かれた記録が千年の歴史を刻んでい
ることを思えば、紙のたくましさとしぶとさを感じざるを得ない。やはり人間は紙とともに歩んできたし、知らず知らずのう
ちに紙を大事にする習性を身につけてきたのである。それはシリコン全盛時代になっても変わらないのではないかと思う。

私は旧時代の人間で、紙の本への愛着とシユウシン(お)は誰にも負けないと自負している。だから、電子書籍への誘いには内心
忸怩たるものがあるが、いずれ紙の本が稀観本(きくわん)となる運命であるらしいとなれば、棲み分ける知恵を発揮してもよいのではな
いかと思うようになった。果たして、それが本当に知的世界を広げることになるかどうかについては疑問を持っているが……。

(池内了「本の棲み分け」池澤夏樹編『本は、これから』所収。ただし、原文の一部を変更した。)

問一 傍線部①の「少々動揺した」のはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を
解答欄にマークせよ。

- 1 紙の本以外に自らの考えを表現する形態は考えられないと思っていたから。
- 2 電子出版では線を引いたり、片隅を折畳んだりできず、不都合この上ないから。
- 3 インターネットという融通が利かないシステムには納得がいかない気持ちをもっていたから。
- 4 電子出版なら読者を増やせるかもしれないと考えたから。
- 5 紙の本なら愛着が生まれて言葉が頭に染みこむという体験ができ、読書の楽しさがあったから。

問二 本文中の空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

カ

キ

ク

ケ

コ

並び、その番号を解答欄にマークせよ。

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ

ア 1 いつも 2 そもそも 3 ところが 4 それでも 5 むしろ

イ 1 さすがに 2 なぜなら 3 つまり 4 けれども 5 だから

ウ 1 いまだ 2 つまり 3 しかし 4 確かに 5 また

エ 1 ただし 2 もちろん 3 そもそも 4 そのため 5 というわけで

オ 1 といえ 2 しかも 3 いつでも 4 むしろ 5 なかんずく

問三 本文中の空欄

a

b

c

d

e

f

の番号を解答欄にマークせよ。

に入る言葉として最も適切な組み合わせを、つぎの1～5の中から一つ選び、そ

1 a カーボン b シリコン c カーボン d シリコン e カーボン f シリコン

2 a カーボン b カーボン c シリコン d シリコン e カーボン f シリコン

3 a カーボン b カーボン c シリコン d シリコン e カーボン f カーボン

4 a シリコン b カーボン c シリコン d カーボン e シリコン f カーボン

5 a シリコン b シリコン c カーボン d カーボン e カーボン f シリコン

問四 傍線部②「記録媒体としての電子書籍は評価すべき」と著者が考える理由は何か。その理由として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 電子書籍を利用することで、きれいな写真を多く使い、本を手にとってもらうことが可能だから。
- 2 紙の本にこだわることで出版社の意向をないがしろにすることになってしまふことを避けられるから。
- 3 電子出版ならほんの少しのシリコンを占領するだけで済み、資源を浪費しなくて済むから。
- 4 大人の理科離れを取り戻し、科学に近づく人間を増やせるから。
- 5 紙の本では一年もたたないうちに店頭から姿を消して、裁断されてしまふから。

問五 傍線部③「果たして学問が血肉化するのかどうか疑問を持ってしまふ」とはどういうことか。その理由としてふさわしくないものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 紙の本の場合にはページを何度も行き来するうちに、本の内容が自分の心に刻み込まれる経験をするが、電子書籍ではそうしたことが十分にできないから。
- 2 紙の本であれば、かつての書き込みなども残り、読み返すことによつて新鮮な気持ちを甦らせてくれるから。
- 3 電子書籍は記録媒体としては優れており、覚えることが得意なシリコン頭には向いているが、それでは思考を深めることはできないから。
- 4 歴史を経た紙の本であればこそ、科学の古典として自らの経験と重ね合わせることができるから。
- 5 電子書籍は記憶を頭の書庫に並べておく上で十分にその機能が果たせるものと期待されているから。

問六 著者が考える本の未来とはいかなるものか。本文の趣旨に最も沿うものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 電子書籍は小さいシリコンに多くの知識を詰め込むことが可能な優れた記憶媒体である。そのことは認めつつも、紙の本が人類の歴史の中で果たしてきた役割は重要なものであり、いずれも引き続き大量に出版される。

2 紙の本が千年の歴史を刻んでいることを思えば、紙の本はしぶとく生き残ると考えられるが、電子書籍は記憶媒体の形式の問題があり、過渡的に選別が進む可能性がある。

3 ノウハウ本や哲学書などが紙の本として出版され続ける一方、出版戦争に生き残ったものだけが勲章として様々な形態で出版される。

4 「悪貨は良貨を駆逐する」ように、新書戦争が繰り広げられることで、あらゆる領域の本が駄目になって、電子書籍も紙の本も出版が難しくなる。

5 電子書籍がノウハウ本などの領域で記憶媒体としての役割をはたすとともに、紙の本は残すべきあるいは価値が認められる本でのみ特別に出版される。

問七 カタカナで書かれた熟語の(あ)〜(お)の傍線部にあてはまる漢字を含む文はどれか。つぎの1〜5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 さいいてい賃金を定める

2 ていねいな説明を心がける

(あ) テイ|サイ 3 しんたい|検査を受ける

4 学会にたいかい|届けを提出する

5 たいへい|の世の中を謳歌する

(い) チケン

- 1 おおよそのけんとうをつける
- 2 けんとう結果を吟味する
- 3 けんえきを守る
- 4 著書をけんぽんする
- 5 ちけんを重ねて新薬を開発する

(う) ガンチク

- 1 理論をこうちくする
- 2 ちくさん業者と値段の交渉をする
- 3 ちくごで英文を翻訳する
- 4 ちよちくに励む
- 5 ちくりんで遊ぶ

(え) ケイキ

- 1 けいき対策を立てる
- 2 けいきを点検する
- 3 けいやくを結ぶ
- 4 けいもう活動を展開する
- 5 けいすうを算出する

(お)

シユウシン

- 1 しゅうせいの誓いを立てる
- 2 しゅうしん時間を決める
- 3 ごしゅうぎを渡す
- 4 事態をしゅうしゅうする
- 5 物事にしゅうちやくするたちだ

